



Title	歴史文化遺産に若者が集まる : 旧校舎を核に交流型文化振興 : 滋賀県豊郷町
Author(s)	山村, 高淑
Description	日経グローバル(2013.1.21. No.212) 「観光地点検」掲載記事
Citation	日経グローバル, 212, 52-53
Issue Date	2013-01-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52025
Rights	本著作物は、日本経済新聞社の許諾を得て掲載しています。日本経済新聞社の許可なく内容の全部又は一部を複写・転載することを禁じます。
Type	article
File Information	nikkeiglobal212_52.pdf



観光地点検

北海道大学観光学高等研究センター准教授

山村 高淑

滋賀県
豊郷町

歴史文化遺産に若者が集まる 旧校舎を核に交流型文化振興



ICOMOS（国際記念物遺跡会議）は1999年に「国際文化観光憲章」を策定し、文化遺産を観光に活用する意義を次のように定義した。「文化遺産の重要性和保護の必要性を地域社会・来訪者双方に理解してもらうこと」。そしてそのためには、現場での直接体験のほか、メディアを通じた知識の取得や感性的な共感も重要であるとした。

つまり、文化遺産の観光活用の目的とは、その文化遺産に対する良きサポーターをつくることにあり、サポーターとは単に文化遺産の価値に関する知識を共有しているだけではなく、親しみや愛情をも共有した存在であるというわけだ。

こうした文化遺産のサポーターづくりを、小規模ながらも着実に成功させている事例に滋賀県豊郷町の事例がある。

解体か保護かで揺れた町

豊郷小学校旧校舎は1937（昭和12）年落成で、同校出

身で丸紅商店専務取締役だった古川鉄治郎により寄贈された。設計は米国出身の建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ。教育史的にも建築史的にも高い価値を持つ建物である。

しかし99～00年にかけて、老朽化と耐震上の問題を理由にこの旧校舎を解体し新校舎を建設する案が浮上。翌年には町会議が講堂解体工事のための補正予算を可決した。

一方これに反対する住民は01年に「豊郷小学校の歴史と未来を考える会」を発足し、保存再生に向けた運動を展開。同年12月には大津地裁に講堂解体差し止めの仮処分申請を、翌02年8月には校舎解体差し止めの仮処分申請を行い、いずれも仮処分決定が下された。

ところがその決定に反して解体工事が強行され、反対する住民が校舎に立てこもるという事態に発展。これを受け、当時の町長は方針を転換、新校舎を建設すると同時に旧校舎は保存するとしたが、住民側との軋轢は解消されず、文化財保護と公共事業の在り方を巡り町長のリコール運動にまで発展していった。

その後、04年に新校舎が完成するが、町は旧校舎の保存を

進め、09年5月、町立図書館などが入る複合施設として一般公開を開始した。

来訪者の交流の場に

この公開と時を同じくして地元が予期せぬことが起こる。突如、多くの若者が旧校舎を訪れるようになったのだ。しかも圧倒的多数が、「文化財としてのヴォーリズ建築」を見る目的ではなく、いわゆる「アニメ聖地巡礼」を目的とした来訪だったのだ。軽音楽部に所属する女子高生を描いたアニメ作品『けいおん!』（2009年4月から第1期放送開始）で主人公たちが通う高校のモデルとして、同旧校舎がファンの間で話題になったのだ。その後も第2期の放送（2010）や劇場版の上映（2011）もあって人気は途絶えることなく、人口約7400人の同町に、現在までに全国から延べ20～30万人が来訪している。

このように継続的にファンが集まる背景には、地域側の機敏な対応とたゆまぬ努力がある。地域側はファンの来訪をいち早く察知し、温かく迎え入れる体制を構築していったのだ。その経緯については岡本健氏の一連の研究に詳しい（例えば岡本健

.2012「コンテンツツーリズムにおけるCGM的観光デザイン」のあり方とその効果」：<http://hdl.handle.net/2115/49634>）が、旧校舎の一般公開が始まった09年5月には、早くも地域側は来訪したファンとの交流を図っている。

そうした中、ファンから多く出た要望が、アニメのシーンで描かれたように「部室でお茶が飲みたい」というものであった。こうした要望を踏まえ、同年6月上旬、商工会青年部や地元住民などが「けいおんでまちおこし実行委員会」を組織。同月下旬には校舎内に作中で描かれた部室を思わせるカフェを開設している。一方のファン側も、校舎へアニメに関連する楽器や文房具、グッズなどを持ち寄ったり、黒板にイラストを残したりすることで、校舎の新たな見どころを生み出している（岡本氏の上掲文献参照）。

文化遺産活用のモデルに

こうした取り組みは、11年に「とよさと軽音楽甲子園」（同町商工会など主催）という形でひとつの花を咲かせる。これは、全国から高校生バンドを募集し、CD審査を勝ち抜いたバンドが、旧校舎講堂のステージで決勝の演奏を行うというものだ。高校生バンドにとっては日頃の練習の成果を披露する場であるとともに、アニメファンにとっては、同講堂は作品中で

ヒロインらが演奏を行った舞台であり、双方が感慨深く楽しめる場となった。2回目の12年は文化庁後援事業となり、最優秀バンドには文部科学大臣賞が授与されている。文化遺産の活用が、旅客誘致だけでなく、高校生に活躍の場を与え、

彼らの夢を叶えるという文化振興にまでつながっているのだ。

さらに注目すべき点は、こうした来訪者の多くが、現地を訪れ実物の文化遺産に触れ、その価値への理解を深めている点である。ネット上の言説を見るまでもなく、今や「けいおん！」ファンの多くは旧校舎の価値のよき理解者であり、ファン側の積極的活動が文化遺産価値の普及に一役買う例も見られるようになった。例えば同人サークル「豊郷小学校旧校舎群記録集製作委員会」は、アニメでヒロインを務めた声優をナレーターに起用し、旧校舎群の歴史と見どころを案内するガイドDVDを製作・販売している。

今後のポイント

豊郷の例には、趣味や楽しみを入り口にしながら、「大切な場所」という想いを共有していくプロセスがある。この「大切な場所」という想いこそが文化遺産の価値の本質だ。地域住民にとっての文化遺産と、アニメ



「けいおん！」ファンが文化遺産である豊郷小学校旧校舎の保存・活用に一役買っている

ファンにとっての作品の舞台は、本来、価値が全く異なる。しかし「大切な場所」という想いは同じであり、そこに共感が生まれるのだ。もちろん、知識も大切ではあるが、感性に訴えかけることも文化遺産の保護には必須である。そしてツーリズムはこうした点で大きな可能性を持つ仕組みなのである。

豊郷の例はこうした観点からも先駆的な事例だ。単に「アニメでまちおこし」の事例としてだけでなく、文化遺産保護の新たなモデルとしても一連の取り組みを成功させていってほしい。

なおアニメや軽音楽など若い世代の文化に対し、文化遺産保護や文化振興に関係のないもの、悪く言えば有害なものとする論調は根強い。しかし当たり前のことだが、現在の文化遺産も成立当時は若い文化であった。批判する前に、今の若い文化を未来の文化遺産に育てるという責任を、大人はまず持つべきだ。この点でも豊郷に学ぶ点は多い。

